

和算研究者のための古典籍書誌学の基礎知識

東北大学附属図書館 米澤 誠

はじめに

現代語訳や復刻版・翻刻版の出版により、和算研究のための資料は数多く流布するようになっている。また、大学図書館などでの古典籍⁽¹⁾の電子化とウェブ公開により⁽²⁾、インターネットで和算資料の原本を見ることが容易にできるようになり、和算研究の環境は格段に整いつつあるといえる。

一方、和算資料を使った研究には、古典籍を適切に取扱う書誌学的な知識が必要であるが、一般の和算研究者が書誌学的な知識を身につけるための機会は極めて少ないのが現状であろう。

本稿では、図書館員としての立場から、古典籍原本を使った研究を志す和算研究者に必要なと思われる書誌学の基礎知識について解説する。また、東北大学和算関係資料から具体的な事例を示すことで、理解を容易にすることとしたい。

1. 古典籍の種類と特徴

一般的に日本の古典籍は、その資料の成立形式から次のように刊本・写本・文書類の3種類の資料に分類できる。和算資料の特色として、写本の割合が多いことがあげられる。

(1) 刊本^{かんぽん}

書肆（書店・出版社）により出版された書籍である。多くは版木による整版出版（版画のような印刷方式）により出版されている。『堅亥録』など版木によらない活字出版も存在したが、和算書の場合は活字版の事例はほとんどない。

刊本として出版されるのは、『塵劫記』諸版などのある程度採算の見込める作品であり、和算書の多くはそのような著作として認められなかったと推測できる。現代と同様、販売部数の見込めない学術図書の出版は困難であったのであろう。

江戸中期以前（おおよそ元禄年間以前）に出版された和算書は、残存数が少なく極めて貴重である。享保年間（18世紀初頭）以降、書籍組合が制度化されて出版活動が盛んとなった時期の和算書は、比較的多数部、残存している。さらに多数部出版された幕末期のものは、数多く現存することとなっている。

(2) 写本^{しゃぽん}

既に成立している著作を筆写した手書きの資料である。自身が執筆した著作原稿は「原

本」と呼び、写本と区別する場合もあるが、広義の「写本」（これを「稿本」と呼ぶ場合もある）に含めて取扱うことが多い。

刊本として出版することができなかった著作は、写本として後世に伝えられた。前述のように商業的価値が認められなかったという理由もあるが、関孝和の『三部抄』など秘伝として流派の中だけに伝えられたような著作も、写本としてのみ存在することになったのである。その結果として、非常に多くの和算書の写本が伝えられ、和算資料全体に占める割合は半数程度あると概算できる。^③これは歴史・文学などの分野にはない、和算資料のもつ大きな特色となっている。

なお、複数の人間が同一の著作を筆写する場合もあるため、同一の書名の写本がいくつか現存することがある。

（３）^{もんじょ}文書類

公表を念頭においた著作ではない、手紙・記録などの手書き資料を文書類という。著作のように筆写されることが少ないので、そのもの一点しか存在しない場合が多い。

和算家が書き残した手紙や記録などの文書類も存在し、それらも和算研究には有用な原典資料となる。しかし本稿は、著作として流布した和算書の、書誌学的な基礎知識を解説対象とするため、文書類は取り扱わないこととする。

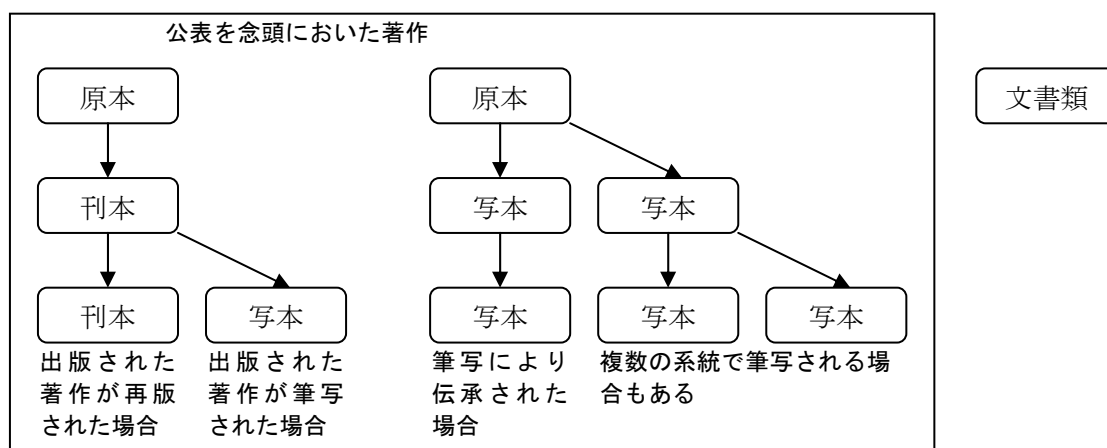


図1 古典籍の種類と伝承形式

2. 刊本の基礎知識

まず、刊本の基本的な書誌事項について説明する。

（１）刊本の書名

書名は刊本のさまざまな場所に表記されており、表記されている場所によって次のように呼ぶこととなっている。

- ・外題（表紙に記されている書名）、封面題（表紙をめくった見返しの書名）、序題（序に附せられた書名）、目録題（目次に附せられた書名）、凡例題、内題（本文冒頭の書名）、尾題（本文終わりの書名）、版心題（版面の中央の柱のような部分「版心」に記された書名）

これら刊本の各箇所に表示された書名が、全部統一されていることは、まずもってなく、それがためにどの表記を正式な書名とするかについて、目録を作成するものとしては大いに悩むところとなるのである。

書誌学的には、著作そのものの名称が表記されることの多い内題を、原則として優先する。外題や目録題、凡例題、版心題などの他の部分では、販売の都合やレイアウト上の都合により、本来の著作名を恣意的に変更するケースが多いからである。

例えば次の『和漢算法』では、内題が「和漢算法」（図 2）となっているのに対し、外題は「新編和漢算法大成」（図 3）、封面題は「新編和漢算法」（図 4）と誇張した表現の書名が付けられている。この場合は内題を採用する。

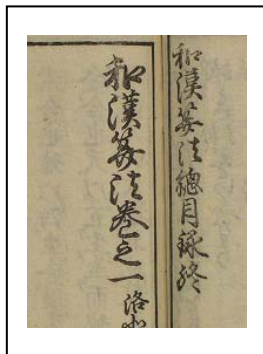


図 2. 内題



図 3. 外題



図 4. 封面題

内題がない場合は、外題や目録題などから共通性の高いものを選択し、書名に採用することとなる。『日本学士院所蔵和算資料目録』⁽⁴⁾や『國書総目録』⁽⁵⁾、『古典籍総合目録』⁽⁶⁾などの所蔵目録で、同一の刊本の書名を参考にするのがよいであろう。

なお、採用しなかった書名は、「外題は『新編和漢算法大成』」などのように注記しておくのが望ましい。

（２）刊本の刊記（奥付）

現代日本の書籍の奥付は、江戸期に刊年・刊行者とその住所を巻末に記した習慣から定着したものである。書籍組合による出版前の検閲が義務化され、海賊版の刊行などが規制されるようになった江戸中期頃から、この刊記の記載が制度化されたといえる。

江戸期初期・中期までは、書籍は通常、単一の刊行者によって刊行されていた。しかし、江戸後期になるに従い、複数の書肆が共同出資して刊行することが多くなってきた。書籍

の販売が、全国規模で行われるようになったことの現れである。幕末期は、全国各地の書肆が名を連ねることも珍しくなくなってくる。

現代であれば、同一の刊本であれば刊記も同じと考えるところであるが、古典籍の場合はそう単純ではない。同一の刊本であるのに刊記が異なっていたり、刊記が欠落していたりする場合があるのである。これは、もとの版木を改変して再版したり、刊記自体を削除して海賊版として出版することがあったためである。よって、刊記を比較することにより、同一刊本の版もしくは刷の差を知ることができるのである。

一方、おおよそ元禄年間以前、奥付が習慣化される前の刊本については、奥付が明記されていない資料が数多い。この場合の刊年の特定は厳密には困難であることから、序文や跋文（あとがき）に記された年号をもって刊年にかえることとする。ただしこの場合、序文・跋文に記された年号は必ずしも刊年とは一致しないことから、「〇〇年序」とか「〇〇年跋」と記述して刊年と区別するのが、書誌学的に正しい取扱いとなる。

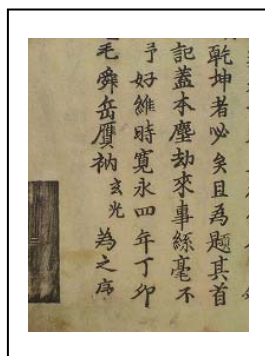


図 5. 序文の年号

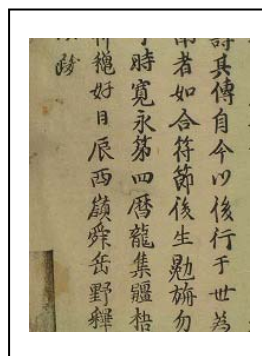


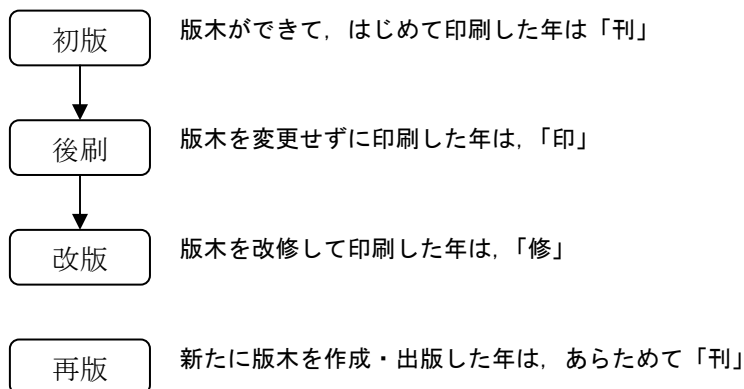
図 6. 跋文の年号

（３）刊本の本文

刊記で述べたように、版木による出版では、後刷（増刷）や改版・再版が容易に行われた。一回の刷りでは、当面販売できるだけの数十から数百部程度の部数しか刷らなかったといわれる。予想以上に販売できた場合は、後刷を行うことになる。そして後刷の時には、内容を改変する場合もあるのである。

また、多部数刷ったことにより版木が摩耗すると、あらたに版木を作成する場合もあった。後刷が多かったものの中には、同一内容のように見えて、版面の印刷文字が微妙に異なるものを発見することがある。この場合は正確には、版が異なるということになるのである。

このように、その著作の初版以降、さまざまに改変され出版されるというのが、古典籍刊本の特徴となっている。そして厳密な書誌学的取扱いでは、それらの年次は次のように「刊・印・修」という用語で区別することとしている。（図 7）



次の資料では、巻末に 2 つの刊記が存在している。初めの刊記（図 8）が初版のものであり、次の刊記（図 9）は後刷のものである。本文内容に違いがないのであれば、「文政 13 年刊・天保 2 年印」とすればよいことになる。

図 8. 初めの刊記

図 9. 次の刊記

さて、以上のように古典籍の場合は、刊本であっても改版や再版により版木の内容に異同が生じる可能性が高い。このことから、刊本であってもできるだけ複数の資料を比較対照して、それがどの版の系統のもので、いつ頃の刷（印）なのか、版木の改修部分はないのかなどの検証が必要となるのである。幕末に大量出版されたものは別として、江戸期の刊本は一点一点異なる可能性があるという前提で、取扱う必要がある。

3. 写本の基礎知識

写本の場合は刊本に増して、一点一点がユニークな資料となっている。同一の著作であっても、筆写という行為自体が著作内容に異同を発生させる要因となるからである。次に、写本の書誌事項について説明する。

(1) 写本の本文

写本は、筆写という行為により成立することから、内容に異同が生じることは避けられない。異同が生じる原因としては、次の3点が考えられる。

- ① 誤写：誤って書き写すこと。書写する者が、手本とする底本を忠実に筆写しようという意図をもっていても、完全に妨げることは困難である。誤った字に置き換わるだけではなく、文字や行が欠落する場合もある。
- ② 改変：書写する者が、好意をもって意図的に本文を改変する場合がある。本文内容を分かりやすくするため、もしくは正確にするために、自分の解釈を加えて文字や文章を改変するのである。
- ③ 校訂：誤写や改変により異同の生じた本文を、本来の内容に復元するために、複数の底本を比較参照する試みである。

このように、同一の著作であっても写本の本文内容は一点毎異なるということを前提として、研究を行う必要がある。原本そのものが残存している場合は別として、写本の著作を学術的・体系的に研究するには、できるかぎり世にあるすべての写本の本文を比較対照して、本来の本文内容を復元する（校訂する）ところから研究を始めなくてはならない。

一方、様々な写本を取扱う時にどの資料をベース（出発点）とするか、ある程度優先順位をつけることが有効である。他者の利用をある程度想定した写本は、非常に丁寧な書体で筆写されている。次の例（図10）は、関孝和の校訂版の作成を試みようとした関流の菅野元健の自筆本であり、他の写本（図11）と比較するとその出来のよさが際だっている。研究の開始にあたっては、このような模範的な写本を起点として、他の写本と比較対照するのが効果的であろう。

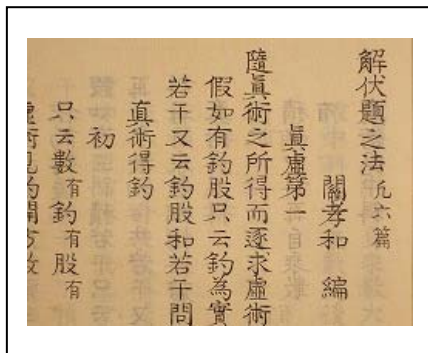


図 10. 菅野写『解伏題之法』

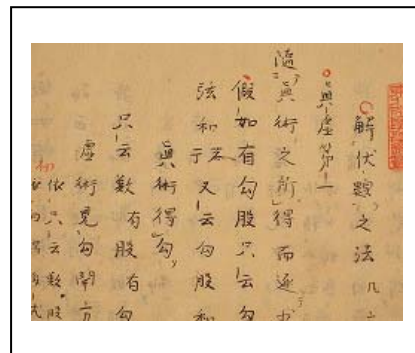


図 11. 『解伏題之法』

（２）写本の書名

書名についても、本文と同様の要因で異同が生じる可能性がある。また、刊本のような書籍的体裁が整えられていない場合が多く、いっそう書名が不安定となりがちである。内題のほかに、外題、序題、目録題などが存在する場合があるので、資料全体を点検し、適切なものを選ぶ必要がある。特に外題には、世間的に通用している著作名が付与されていない場合があるので、注意する必要がある。また、同一書名でも、内容的にはまったく異なる著作の場合もある。

図書館が作成した目録などで、書名としては不可解と思われるものの多くは、本来の著作名とは異なる外題を書名として記述している。内題まで確認していれば、このような初歩的なミスは犯さないはずである。次の例は、目録上の書名は『測量篇』となっているが、正しくは内題に従い『砲家秘函測量篇』とすべき写本である。この場合も、外題は注記しておくのが望ましい。

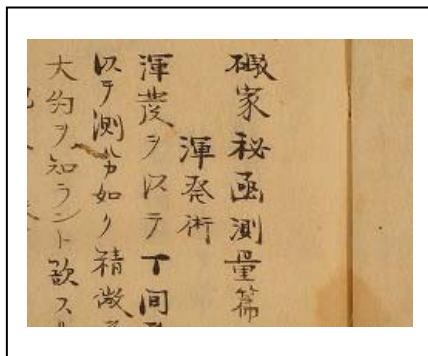


図 12. 『測量篇』内題



図 13. 『測量篇』外題

（３）写本の書写者

写本の場合、刊本の刊記に相当するのが巻末に記される識語である。ここには、書写者や書写年が記される。著作原本の識語の場合は、それが著作者と著作年の情報となる。

しかし、多くの写本では、次のように事情が複雑となる。

- ① 原本の識語をそのまま筆写した場合、書写者は著作者と別人であり、書写年も異なる。
- ② 原本の識語をそのまま筆写し、さらに書写時の識語を加えた場合は、概ね著作原本の情報と書写時の情報とみなしてよい（それをさらに書写した写本である可能性もあるが）。
- ③ 筆写時の識語だけである場合、著作者および著作としての成立年は、別の情報から探る必要がある。
- ④ 識語がまったくない場合、著作者および著作としての成立年、および書写者・書写年に関しては、別の情報から探る必要がある。

写本の多くは④のケースである。著作者および著作成立年については、本文冒頭などか

ら分かる場合があるが、多くの場合、書写者・書写年を確定することは困難である。

①のようなケースで、著作者による自筆原本なのかそれを底本とした写本であるかを判別するには、自筆と評価が確定している他の原本の書体（筆跡）と比較する必要がある。個人の書体には特徴があるので、出現するいくつかの文字を比較することで、おおよその判定はできるものである。

さいごにかえて：和算ポータルの有用性

以上、古典籍書誌学の基礎知識の解説の中で、和算研究における残存資料の比較対照の必要性について理解していただけたと思う。東北大学和算ポータルサイトは、ウェブ上で複数の和算資料を比較対照できる環境の実現を目的としたものである。そのために、同じ著作について、数種類の同版・異版の資料の電子化を進めている。これは、数多くの和算資料を所蔵する、東北大学ならではの実現できるものである。

また、和算ポータルに収録した和算資料全文画像データベースのキーワード検索機能は、和算資料の書名や途中の文字列単位でも検索でき、不確かな情報から検索するのに極めて有効なものとなっている。和算研究者諸氏の原本研究に役立てていただきたい。

なお、古典籍書誌学についてさらに知識を深めたい場合は、専門家の手による良書の読解を勧めたい。(7)

注

- (1) ここでいう古典籍とは、1868年以前に成立した（刊行もしくは筆写された）和装本を意味する。
- (2) 例えば次のサイトなどがある。東北大学附属図書館．東北大学和算ポータル．（オンライン）．<<http://www2.library.tohoku.ac.jp/wasan/>>
- (3) 東北大学所蔵和算関係文庫の統計値から推計した。
- (4) 日本学士院編．日本学士院所蔵和算資料目録．岩波書店，2002年
- (5) 岩波書店．国書総目録．補訂版．岩波書店，1989-1991年
- (6) 国文学研究資料館編．古典籍総合目録：国書総合目録続編．岩波書店，1990年
- (7) 本稿は、次の文献に多くを教わっている。

・林望．書誌学の回廊．日本経済新聞社，1995年（改題再刊：リンボウ先生の書物探偵帖．講談社文庫，2000年）

また刊本（版本）については、次の書籍も基本的な文献となっている。

・中野三敏．書誌学談義 江戸の板本．岩波書店，1995年